ハヤテのごとく！～二人目は２億５千万～

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハヤテのごとく！～二人目は２億５千万～

【Ｎコード】
Ｎ７３１６Ｙ

【作者名】
原石

【あらすじ】
両親が２億５千万という莫大な借金を残して蒸発してしまった悲劇の主人公、翡翠龍牙。そんな彼がとある出来事をきっかけに三千院家の執事としてドタバタと馬車馬の如く働いていくお話。

第1話　三日遅れのクリスマスプレゼント（前書き）

ついにハヤテのごとく！の小説を。

どうなってしまうか分かりませんが感想・評価・お気に入り登録という流れで言ってくれれば幸いです。

第1話　三日遅れのクリスマスプレゼント

「なにも……ない、だと……」

そろそろ年末だ今年は何食って年越そうかなーと考えるこの時期。
日本人だったらとりあえず家の掃除でもするこの時期。
緑の髪だけが特徴の俺、翡翠龍牙（ひすいりゅうが）は絶望していた。
それは何故か。っていうか俺のこの絶望を味わってくれ。
実は――――――――家の中が空っぽになってるんだ。

「いやいやいや、あり得ねえだろこれ……」

普段通り高校に行って普段通りバイトして家に帰ってきたらこの状況。なに？神様は一体何をしたの？俺を虐めてそんなに楽しいの？
そうだとしたらマジでお前死ねよ。いらねえんだよこんな三日遅れのクリスマスプレゼント！！っていうかすでにプレゼントですらねえわアホ！！なんで！？　何があったんだよ本当にもう！！

「――――ん？　何もないハズのＭＹ　ＨＯＵＳＥに紙切れが一枚あるんですけど……」

畳すらはぎ取られたこの家に一枚の紙きれ。話だけ聞くとホラーだよね。でも俺にとっては家の家が空っぽになってるこの状況こそがホラーなんだ。

「えっとなになに……『借用書』か……って借用書！？」

ハッキリ宣言しよう。俺は生まれてこのかた人に金を借りたことが一切ない。っていうことはこの借用書はあのクソ両親の仕業だな？

相変わらずのギャンブルでまた家具を持ってかれたってオチだろう。ん？ちょっと待てよ？　だったら何故この場にアイツらが居ねえんだ？

「嫌な予感がビシビシする……これはあれだ。ル〇ージが紹介されたマンションに入る時の恐怖だ。大丈夫。俺には何も怖くない。ル〇ージよ……俺にご加護を……」

俺は伝説の緑帽子のひげ面ボーイに守護を頼んで続きを読んでいく。

「えっと…『ごっめーん♪いつもの調子で競馬やってたら所持金がゼロになっちゃってさぁ♪それだからお金借りたんだけどそれでも止めるタイミング失っちゃって結局借金がこんな感じに☆見て見て～♪』ってなんじゃこりゃぁ！？」

ぐしゃっ

俺はつい持っていた借用書を握りつぶしてしまう。いやマジでこの金額はあり得ねえって……どこの王族だ貴様らは……

「2億……5千万……？」

ＨＡＨＡＨＡ！！そんなバカな！！そんな金額があり得ますか？絶対にない。これはドッキリだ。そうだそうに違いないそうだと信じてる。大丈夫だ。俺にはル〇ージがついてる。こんな不幸屁でもねえ。

そう自分に言い聞かせて俺はも一度視線を借用書の金額のエリアにやる。

「かはっ」

畳すら敷かれてないむき出しの床に鮮血が飛び散った。ハハハ……おかしいな……別に病気ってわけじゃねえのに吐血しちまったよバカヤロー。

「続きを……『こんな金額私たちじゃ返せるわけなーいっ♪だから返済よろしくね龍牙☆』ってあんのクソババァ――――――――！！」

そこらへんの一般高校生がこんな金額返せるわけねえだろ！！なんだよ二億五千万って！！無理だ！！無理だよパトラッシュ！！

ドンドン！！ドンドン！！

『おらぁ！！金返せ！！無理なら息子の臓器持って来い！！』

「ひぃ！！」

ボロアパートの一室のドアはそこまで頑丈じゃない。このままでは世にも恐ろしいＹＡＫＵＺＡに掴まってホルマリン漬けは免れないだろう。アハハ……この年で死亡かぁ……洒落になってねえよオイ。

「大丈夫ここは４階だ落ちても死なない自分を信じろ……せーのっ！！アイキャンフラァ――――――イ！！」

あ……四階って意外に高いんだねー……

ドグシャッ

雪の積もった地面に盛大に顔面を打つ俺。意外なところに幸運が雪

が積もってるなんてラッキー♪
こんなことで幸せを感じることができる俺って……はぁ。

「ってそんなことより今は逃げねえと！！ダーッシュ！！」
『ああ！！アイツ逃げやがった！！』
『逃がすんじゃねーぞ！！絶対に捕まえろ！！』
「ああ、もう見つかったよコンチクショー！！」

サンタさん……こんなクリスマスプレゼント……絶対に要らなかったよ……
俺はスタミナが許す限り走り続けた。

「はぁ……はぁ……やっと撒いたか……」
全力で取り立てやから逃げること2時間。やっとの思いで逃げ切った。なんだ、俺ってまだ凄いとこあるじゃんか。
「っていうか……ここ……どこ？」
見渡す限りの大海原。ＴＨＥ・海。まごうことなき海。なんでだろ

ーね……この体中を襲う脱力感……

「もう、いいか……」

バタッ

全身の力が抜けた俺はその場に倒れこんだ。
無理だったんだよ……俺が人並みの幸せを謳歌するなんて……
生まれつき両親に恵まれなかった俺。唯一の仲間である双子の弟は一年前に行方をくらましてしまって今まで一人で家族を支えてきた。
……いや、支えてきたって言っても手に入れた給料全部ギャンブルに使われてたから養っては無い。
クリスマスなんて今まで一回も祝ったことなんかないしプレゼントなど以ての外だ。

「雪が……冷たい……」

地面に積もった雪がじわりじわりと俺の体温を奪っていっているのが身に染みて分かる。俺……このまま死ぬのかな……16年間バイトで明け暮れた日々。遊びなんてしたこともない。金もなければ暇もない生活を送っていたからしょうがないんだけどさ……こんなんで良かったのか俺の人生。

「まぁ……来世に期待ってことで……」
「いやいやいや今の人生に希望を持ちましょうよ……」
「そんなこと言っても動けないし、お腹減ったし……ん？」

今更ながらに気づいたんだけど俺の呟きに返事をしたのは誰？
そう思った俺はゆっくりと頭を上げて上を見た。
そこには――――――

「聖母……？」

――――――聖母のような美しい女性が腰を下ろして俺を見下ろしていた。

「聖母じゃないんですが……」

「いやそれは嘘ですね。多分報われない人生を送っていた俺に神様が始めてくれた三日遅れのクリスマスプレゼントだと思うんスよ」

「さらっと重いことを言いますね貴方……」

重いかな？　まぁ、人並みの人生とはとても思わないけど。

「で、貴方はなんで氷点下に到達しそうな気温の中冷たい雪の上で薄着で倒れてるんですか？」

「……なんかそのセリフだけ聞くと俺が凄くバカな奴に聞こえますよね……」

「え？」

目の前の聖母のような美人さんが凄く失礼なことを考えている気がした。

「おいアンタ、今のリアクションはなんだ」

「え、えーと……私何か言いました？」

「別に天然キャラのような返しは望んでねえよ！！っていうか何でこの状況でコントしなくちゃなんねえの！？」

「ごめんなさい。私ったらあまり貴方のこ『いいところに女がいたぜ！！』とを『コイツ攫って身代金でも要求するとしよう！！』考えずに――――――――え？　きゃあ！！」

突然現れた黒づくめの集団に聖母さんが攫われた。
え……？　なにコレ……名探偵コナン？
「ってそんな場合じゃない！！早く助けないと！！」
俺はぎしぎしに脆くなっている体にムチ打って聖母さんを乗せた黒いマーチを追いかけた。

――

突然誘拐された聖母さん――――マリアは頭を悩ませていた。
「（あー……携帯電話を家に置いて来ちゃうなんて……）」
携帯電話があれば家に連絡して助けに来てもらえるのだがその連絡方法が無い。しかも自分の左右には屈強な体つきをした黒づくめの男が座っているので脱出はほぼ不可能だ。そんな状況の中でとりあえず携帯電話のことを考えているマリアは神経が図太いんだと思う。
「（む。今何か失礼なことを言われた気が……）」
流石は三千院家のメイド。地の文ですら読み取ってしまうらしい。恐ろしい能力だ。
「（それにしてもさっきの子……なんだかハヤテ君に雰囲気が似てましたね……）」

その雰囲気というのはおそらく金が無い貧相なオーラのことを言っているのだろう。憐れ龍牙。初対面の人にすら貧乏人扱いされてしまうなんて……

「（やっぱり借金とか抱えてるのでしょうか……？）」

だったらハヤテ君の時みたいに何とかしてあげたいなーと考えるマリアだったがその思考は黒づくめの男たちの会話によって打ち消されることとなる。

「ゲヘヘ、兄貴コイツは上モノですぜ」

「ああ。コイツなら別に身代金を要求しなくてもたんまり稼げるだろうぜ」

「「ゲヘヘヘヘヘ……」」

「（こんな時ナギだったら罵倒に罵倒を重ねて怒りを買うんでしょうね）」

自分が使えている三千院家のお嬢様である三千院ナギの不機嫌そうな顔を思い浮かべて思わずクスッと笑うマリア。しかしその行動をこの黒づくめの男たちが見逃すわけはなかった。

「おいおい姉ちゃん。お前今の状況分かってんのか？」

あーあーやっちまったよオイと言わんばかりの表情を浮かべるマリア。別に恐怖を感じているわけではないのだがこういう輩は調子に乗ってくると面倒なことをしてくる時があると知っているから顔を引き攣らせている。

「まぁ、誘拐されているんでしょーね。なんだか貴方たちの恰好が怪しいですし」
「あぁ！？　なんか言ったか！？」
「いえ別に」

だったら聞くんじゃないわよと言ってやりたかったマリアだったがこれ以上状況を悪化させるわけにはいかないので下にうつむいて静かにする。

「ケッ。そうやって生きがってられるのも今の内だ。お前はそのうち外国で奴隷として働かされるんだからなぁ！！」
「「ケヒャヒャ！！」」
「（あー……この人たちは奴隷商人でしたか……まだいたんですねそんな職業の人たち……）」

そろそろ本気でマズイと思ってき始めたマリアはちらっと走っている車の窓から外を見た。
その瞬間マリアは自分の目を疑う光景を見ることとなる。

「……え？」

思わずマヌケな声が漏れてしまうほどありえない光景が目の前には広がっていた。その光景とは・・・・・・・・・先ほどの青年――――龍牙がマリアを乗せている車と並走している光景であった。

「ウソ……でしょ……？」

この車はおそらく時速８０キロオーバーぐらいの速度で走っている。真夜中すぎて車の通りが少ないからだろう。しかしこの青年はその速度と同じ速度で走っている。自転車に乗っているわけではない。

その2本の足でついてきているのだ。

「あ？　何見てやがん――――――！？　な、何だコイツ！？」

「オイ！！どうした！！」

「お、男が車と並走してやがる！！」

「んなバカな！？」

龍牙の存在にやっと気づいた男たちがざわざわと焦りだす。生まれて初めて見るであろうその光景に気が動転しているのだ。

翡翠龍牙は生まれつき借金家族の息子だった。

それはイコール常に逃げる生活を送っていたということになる。

十数年間その2本の足で借金取りから逃げ続ける日々。

それは着実に龍牙の足を鍛えていった。

という理由があって今の龍牙は車と並走できるほどの脚力を持っているのだ。

『コラァ！！その人を解放しろ！！この誘拐犯ども！！』

バンバン！！バンバン！！

並走しているにも関わらず息ひとつ乱れていない龍牙は窓を拳で叩いて訴えかける。

その光景を見た男たちはあまりの恐怖に車のスピードを上げる。

『逃げんなって言ってんだろぉ――――――がっ！？』

ドンッ！！

ついムキになって車の前に飛び出した龍牙が勢いよく宙を舞った。

当たり前だ。９０キロ近く出ている車の前に飛び出したのだから。

「っ！！」

「や、ヤベェよ兄貴！！」

「う、うっせえ！！いきなり飛び出してくる奴が悪ィんだ！！」

突然の出来事に急ブレーキをかけて車を止める男たち。

マリアは轢かれて血まみれになって倒れている青年を窓越しに見詰めていた。

その頃龍牙は――――

「（痛ぇ……頭がぐわんぐわんってなってる……）」

血まみれの頭を抑えながらゆっくりと車の方へと歩いていっていた。

今の龍牙は血を失いすぎて一種のトランス状態に陥っている。

今の彼を動かしているのは見知らぬ聖母を助けるというその一つの事だけ。

「俺が今死んだらあのクソ両親が俺の生命保険でのうのうと生活しちまうだろぉーが！！」

なんて重い理由だろうか。自分の両親が楽な生活をすること自体に腹を立てて自分に喝を入れる。

そしてその血まみれの体を助手席側の窓に押し付けて――――――

「その人を……返してくれないか？」

「「「……は、はいぃ！！」」」

―――――――――――――――――――――――――――――――

「だ、大丈夫ですか貴方！！」

龍牙の活躍で車から解放されたマリアは一目散に龍牙のもとへと駆け寄った。

「ま……まぁ、体は意外と丈夫なンで……」
「は、はぁ……貴方には何かお礼をしないとですね」
「お……礼……スか……じゃ、じゃあ仕事く…ださ……い……
（がくっ）」
「ちょ、ちょっと！！」

出血多量で意識を失う龍牙。しかし彼の顔には笑顔が浮かんでいる。自分の目標を達成できて嬉しかったのだろうか？　それともただ血を失いすぎてテンションがハイになっているのか。

『マリアさ――――ん！！』
「あ。ハヤテ君」

パトカーがたくさん集まっているのを聞きつけたようで三千院家の執事である綾崎ハヤテが買い物袋片手にやって来た。彼は１億５千万という莫大な借金を抱えている執事なのだ。

「だ、大丈夫なんですかその方は！？」
「……三日前の貴方と同じ状況と思うんですけど……まぁ、この子は屋敷に連れて帰ります」

「え？　どうしてですか？」

ハヤテが頭に疑問符を浮かべて首を傾げているのを見てマリアは微笑をたたえてこう言った。

「仕事を見つけてほしいと言われましたから（ニコッ）」

その笑顔は聖母のように美しかった。

第1話　三日遅れのクリスマスプレゼント（後書き）

龍牙（以下、龍）「どうも。今回のあとがきを任された主人公の翡翠龍牙だ」

龍「さて、第1話から俺がボロボロなんだが大丈夫か？　はっきり言って続くか？まぁ、いい。じゃあ今から俺の波乱万丈な人生を聞いていただくとし――――――」

＜長くなりそうだったのでカットしました♪＞

キャラ紹介　翡翠龍牙（前書き）

龍「俺のキャラ紹介なんだけどイラストが下手かもしれない。静かに見逃してくれると嬉しい」

キャラ紹介　翡翠龍牙

ＰＲＯＦＩＬＥ

【名前】翡翠龍牙
【年齢】１６歳
【誕生日】７月１８日
【血液型】Ｏ型
【家族構成】
父
母
弟（双子）
【身長】１６５ｃｍ
【体重】５３ｋｇ
【好き・得意】
走ること・ツッコミ・ミックスグリル
【苦手】
掃除・勉強

＞ｉ３５５３２―３４１６＜

２億５千万という莫大な借金を押し付けられた悲劇の主人公。
双子の弟の居場所を本人は知らない。
基本的に常識人でツッコミ担当なのだが時折ボケに回ることも。
いつも借金取りから逃げてたため足が怖ろしく速い。
性格は若干ダウナーだが知り合いには優しい。
三千院家の執事としての能力はハヤテに劣るが、身体能力はハヤテ以上。
そのツッコミセンスを咲夜に買われて相方になってくれないかと頼

まれているが本人は断わっている。
勉強は嫌いだが高校生には戻りたいらしい。
因みにハヤテのように不幸体質ではない。

キャラ紹介　翡翠龍牙（後書き）

龍「次回予告！！意識を失った俺が目を覚ますと見知らぬ豪邸に！！これは夢か現か幻か！！それを確かめるべく俺は散歩をすることに――――――

次回【第２話　夢を見ない人は意外と多い】！！乞うご期待！！」

第2話　年末って色々とありすぎて正直休みが少ない（前書き）

「第2話です！！お気に入り登録してくれると嬉しいです」

By　綾崎ハヤテ

第2話　年末って色々とありすぎて正直休みが少ない

――――――――――――眩しい……

龍牙がまず最初に思ったことはそれだった。
そして目を開くと……かなり見覚えのある人物が自分を上から覗き込んでいることに気づく。

「あの……聖母さん？　そんなに近いと起き上がれないンすけど……」
「え？　あ！ご、ごめんなさい！！」

素早く龍牙の上からどいた聖母――――マリアはすぐにペコペコと謝罪を繰り返した。
うわー女泣かしてるよコイツー　という言葉が頭に響いたとか何とか。

「ナレーションうるせえよ！！」
「…え？」
「い、いやコッチの話っす。あははー……」

後で殺すとこっちを睨む龍牙。
まぁ、常識的に無理だから気にしないようにしようと思う。

「で、えっとー……ココはどこっスか？」

自分の真横に置いてあるかなり高級そうな花瓶をだらだらと汗をかきながら見て言う龍牙。

彼は人生柄、こんなものに縁が無い生活を送っていたので体が拒絶反応のようなものを見せているのだ。
貧乏人の心は弱く儚い。

「ここは私が住んでいる家です」
「へ、へぇー…家ッスか……」

家にしてはデカいなオイと言いたい衝動をぐっとこらえる。

「おーいマリアー、入るぞー」
「失礼します」

すると龍牙とマリアがいる部屋に金髪ツインテールの少女と水色の髪のなんとも金に縁のなさそうな少年が入ってきた。

「あ、ナギにハヤテ君」
「気が付いたみたいですね、マリアさん」
「なぁ、聖母さん。そこの執事っぽい人と小学生の少女は一体誰ですか？」

ボコォ！！

「口のきき方には気を付けろ」
「い、イエッサー……」

ナギの全力のゲンコツを脳天に喰らい龍牙は涙目になる。
そんな龍牙を見てあははー…と引き攣った笑いを浮かべるマリア。
その隣では水色の髪の少年――――ハヤテが龍牙に一心不乱に頭を下げている。

「ったく、こんな奴が私の新しい執事になるかと思うと頭が痛くなる……」
「え？　執事？」
身に覚えも聞き覚えもないことに首を傾げる龍牙。
マリアは笑顔を浮かべて龍牙に説明を始めた。
「えっとですね――――――」

――――――――――――――――――――

聖母さん――――マリアさんからの説明によると、どうやら俺はこの金髪ツインテールのもとで働くことになるらしい。
いや仕事は欲しかったから渡りに船の状況なんだけど俺って執事とかやったことないし借金あるし……
「2億5千万でしたっけ？　ハヤテ君を軽く凌駕してますね？」
「いやいやいやいや、笑いごとじゃないし。絶対に返済は無理ですから！！」
「諦めちゃ駄目ですよ！！僕にだって1億5千万という莫大な借金があるんです！！一緒に頑張りましょう！！」
「別にこんなところで仲間を見つけたラッキーとかいうことにはなりませんからぁ！！ってゆーか、結局状況はかわってないんだって！！」

2億5千万。
たった5文字で表すことができるその金額は俺の人生をフルで使っても完済は難しいほど。
どんなに馬車馬の如く働いても貯まるかどうか怪しい金額だ。
宝くじでも買うか……？　未成年だけど。

「ハヤテの借金は私が肩代わりしてやったがお前は誰が肩代わりしてくれるんだろうなぁ？」
「肩代わり！？　テメェ自分だけヤクザからの熱いアプローチを避けやがったなぁ！！」
「事情があったんですって！！そしてその場の空気とか！！」

ケッ。なんて野郎だ。自分の危険を少しでも減らそうとするなんて。
俺なんて十数年近く借金取りから逃げ続けているというのに。
あれ？そう思うと少し悲しくなってきた。

「まぁまだ龍牙君は執事という仕事をよく知りませんし無理やりというワケ「やりますっ！！」には……へ？」
「ってアレ？　なんでマリアさんは俺の名前を知ってるんですか？
自己紹介をしたわけでもないのに……」
「それはコレを見たからですね」

そう言ってマリアさんがメイド服のポケットから取りだしたのはあの忌まわしき借用書。
おそらく俺の着ていた服から盗ったんだろう。
なんて手口か。ル〇ン顔負けです。

「2億5千万の借金を抱えている高校生なんて今まで見たことも聞いたこともないですわよ？」
「俺だってその見たことも聞いたこともないような高校二年生にな

りたくなかったですよ……」
泣いてなんかないよ？これは心の汗なんだ。
「で、結局私の執事として働くのか？」
「働きます！！いや、働かせてください！！仕事をください！！」
「な、なんて食いつき様……」
「世間の失業者も真っ青の食いつきっぷりですね」
「そうですか……とりあえずお夜食でも食べます？」
「はいっ！！！」
俺はその後、マリアさん特性のうどんを食べた。
凄く豪華な食材をふんだんに使っていたことが気になったけど……

「新しい執事？」
この三千院家の執事長であるクラウスがキラリとメガネを光らせてマリアの方を振り返る。
「ええ。凄く可哀相な境遇だったので雇おうかなーって思ってるんですが……」
「それは既に決定しているような言い方だな。その新しい執事とい

う翡翠龍牙はどんな男なんだ？」
「そうですねぇ……全力で走って９０キロオーバーの車に追い付いてその速度で走っている車に轢かれてボロ雑巾のような状態で私を助け出せるぐらいの少年ですわ？」
「……それはどこのシュワルツネッガーだ？」
「いえ、一応ハヤテ君と同じように人間ですけど……」

マリアの返答に頭を抱えるクラウス。
彼は数日前にハヤテのことで同じように頭を抱えた経験がある。
そしてその数日間に自分の身も巻き添えにされそうになったこともしばしば。
彼自身としてはこれ以上自分の信頼を失いたくない。
しかし変な執事が増えても困る。
クラウスは数分間考えに考えてようやく決断を出した。

「許可しましょう。その翡翠龍牙を新しい執事として雇うことを」
「ありがとうございますクラウスさん？それではこの旨を龍牙君に伝えてきますわ♪」

――――パタン

マリアが部屋から出て行って一人取り残されるクラウス。

「空が……青いな……」

彼の顔には涙が流れていたという。

──────────────────

「え？　オーケーもらえたんスか？」

「はい？　これで今日から龍牙君は三千院家の執事ですわ」

ヨッシャァー！！と両手を天に突き出して歓喜する龍牙。

彼としては寝床と食事さえ確保できればよかったのだがこんな豪邸に住むことになってなんて幸運だ！！と喜ぶことに。

「これからよろしくお願いしますマリアさん！！」

「ええ、よろしく」

龍牙はマリアに向かって深く腰を折ってお辞儀をする。

すると彼に小さな魔の手が襲い掛かることとなった。

「………おい龍牙」

「な、なんでしょうか……お、おじょ・・・・・お嬢様」

「ナギでいい。言いにくいのだろう？　まぁ、今はそんなことどうでもいいのだ」

「じゃあ何の用なんだよ」

「敬語すら使わぬか……って話が逸れる！！龍牙！！お前マリアに手を出したら即刻クビだからな！！」

「なっ……」

龍牙の体に落雷が落ちたかのような衝撃が走った。

「って手を出す気だったんかい！！」

「べ、別にそんなことねぇよ！！ただ仲良くはさせてほしいかなー？って思ってただけだ！！」

「うるさい！！うるさい！！うるさい！！マリアに手を出してみろ

？　私の権力をフルに使ってお前を滅亡させてやるからな！！」

かつて自分の執事をここまで陥れようとするお嬢様がいたであろうか。

そんなナギに震えながら何回も首が取れるぐらいの勢いで頷きまくる龍牙。

上下関係ココに成立。

「とりあえず私に料理を作って来い！！マリア、それにハヤテも一緒にな！！」

「分かりましたお嬢様」

「じゃ、行きましょうか龍牙君？」

「ってマリアさん！？　手！！手！！」

「手がどうしました？」

「いや、もういいです……」

「それじゃあ行きましょうか？」

龍牙の手を握ってキッチンへと消えていくマリア。

そんな彼女を見てハヤテはさっとナギのもとへと近づいていった。

「マリアさん……龍牙さんに助けてもらってからあんな感じなんですよ。もしかして惚れてるのかもしれません」

「は……はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？？」

三千院家の豪邸にお嬢様の全力のシャウトが響き渡った。

第2話　年末って色々とありすぎて正直休みが少ない（後書き）

「あと評価と感想もお願いするのだ！！」

By　三千院ナギ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7316y/

ハヤテのごとく！～二人目は２億５千万～

2011年11月23日16時52分発行